

# ひ

特集

## スポーツ・体育って なんだっけ？

スポーツ大会が頂点となる学校生活……望月正弘

「体育研究校」でのたった一人の抵抗……持山静雄

体育教師の実像を君は知っているか……岡崎 勝

地球の中心に向かって

自分の頭で立つ逆立ち……依田節夫

学校体育と軍隊の類似性……佐藤秀夫

はびこらせよう、草の根スポーツ……虫賀宗博

管理装置としてのスポーツ……影山 健

中学校の検定教科書(英語)への公開質問状

……江藤美代子・中川雅子・「ひと」編集委員会

【小学1年・ことばあそびの授業】さる・○○る……関 昭人

「わからない」楽しさが

心をぐーんとふくらます……曾田 蕭子



# と

# 2

遠山啓 創刊

教師と父母と学生・生徒のための月刊誌

編集▶「ひと」編集委員会

1990年2月号206号 発行▶太郎次郎社

# ひと

1990年2月号 第206号 Vol.18 No.2

〔特集〕

## スポーツ・体育って なんだっけ？

望月正弘  
スポーツ大会が頂点となる学校生活……4

「水泳・陸上大会優勝」という栄誉のために、生徒たちをしごく体育教師

持山静雄

「体育研究校」でのたった一人の抵抗……11

戦時中の少国民のように、一糸乱れぬ集団行進を強制される小学生たち

岡崎勝

体育教師の実像を君は知っているか……18

頭脳をバカにされつつも「肉体的パワー」と「情念」で学校を支配する彼らの育威

依田節夫

地球の中心にむかって、自分の頭で立つ逆立ち……25

地球の中心から、頭・腰・足、そして天が結ばれる瞬間が気持ちいい

佐藤秀夫

学校体育と軍隊の類似性

先輩×後輩、行進、相撲場と国旗台、跳び箱・肋木……38

集団の効率的な操作手段として、学校がモデルとしたのは軍隊だった

虫賀宗博

はびこらせよう、草の根スポーツ……82

私のラグビー実践

政府・軍隊・学校・企業に利用されているスポーツをほくらの手に取り戻そう！

石原淳

部活がなかったら、キミたちどうする？

〔インタビュー〕子どもたちは部活動をどう考えているか……90

西島陽子・佐藤早苗

〔母親・主婦からの発言〕

子どもにとっての

体育・スポーツ・部活動をこう考える……93

影山健

管理装置としてのスポーツ……95

「ルールの遵守」「集団への忠誠」を植えつけるのにスポーツは最適である



江藤美代子・中川雅子・『ひと』編集委員会  
文部省教科書調査官、教科書執筆者・  
監修者、教科書会社(4社)への公開質問状  
どうにかならないか、英語教科書……46

❖ 関昭人  
小学1年生・だれでもできることばあそびの授業  
さる・○●る……60

❖ 曾田蕭子  
「わからない」楽しさが、  
心をぐーんとふくらます……72

❖ 井坂升美  
小学4年生・算数探険物語  
「角あそびサーカス」の授業①……102

❖ 野辺明子  
「ひとつの問題提起」  
子どもの「障害」を隠さず堂々と育てよう……1  
手がない、足がない子どもたちのこと

⑦ 伊東信夫  
死と向かいあう人びとの輝く日常  
書評：『病室——教室への伝言』(徳永進著)……57

⑦ 「ひと塾」実行委員会  
1990年代の「ひと塾」をどうするか  
「出前ひと塾」・「一品もちよりひと塾」・「全国ひと塾」……79

連載

南伸坊  
顔年表⑩……42

銀林浩  
ここが問題だ、いまの算数・数学教育⑩(最終回)  
2年生の量指導はどうなっているか……110

平林浩  
問題作成術・科学  
「1億分の1の地球」を描く……100

フォト・レポート

「このまま生まれてきたのだから、  
このままでも、いいと思う」  
写真集「いのちはずむ仲間たち」  
(先天性四肢障害児父母の会編)の子どもたち  
写真・文 大谷英之

遠山塾からのお知らせ……118  
各地の「小さなひと塾」からのお知らせ……121

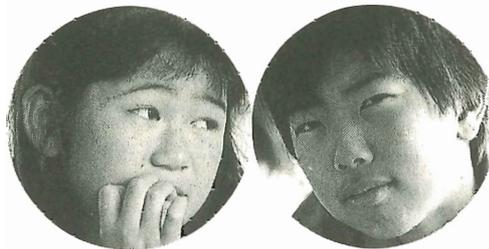
次号3月号の特集予定

「現代社会の授業・  
ゴミからの逆襲」(仮題)

表紙立体作品＝北山理子  
表紙撮影＝富山義則  
本文カット＝桂川 潤  
表紙・本文タイトルデザイン＝中山銀士

★……本文中の写真は、内容説明写真以外、  
いつさい本文とは関係ありません。

# 管理装置としてのスポーツ



## 影山 健

いま、スポーツは子どもたちの生活にとっても、中心的なものになっています。しかし、スポーツがこのように盛んになったのは、歴史的にいうと、ごく最近のことといわなければなりません。

以前、私の研究室の学生が、岡崎地方における昔の子どもたちの遊びを調べたことがあります。この地方に住むお年寄りたちに昔の遊びを聞いてまわったのです。その結果、「ぼんつく」という遊びがいちばんよく行なわれていたということがわかりました。「ぼんつく」というのは、この地方で魚取りのことを一般にそういつていたのでした。そのほか、かくれんぼやとんぼ

とりなど、季節的な遊びがたくさんあげられました。

しかし、いまの子どもたちは、これらとはまったく違う遊びをしています。いまの子どもたちのあげる遊びといえば、野球・サッカー・水泳などのスポーツか、ファミコンです。そして、岡崎出身の学生に、「ぼんつく」って知っているかということも聞いても、ほとんどの人は知りません。ここ百年ばかりの変化がいかに激しかったかということがわかります。

現在、体育やスポーツをめぐってはいろいろな問題がおこってきています。部活の過熱化や勝利至上主義、しごきや暴力、「楽しくない」体育など

です。しかし、考えてみると、これらの問題はなにも最近おこってきた問題ではありません。これまでにもたびたび指摘されてきたことでした。けれども、あらたまるどころか、ますますひどくなってきているのが実情です。

そこで、これらの問題の解決のためには、これまでのようなたんなる対処療法だけではだめということになります。そして、これらの問題を生みだしてきている基礎を明らかにし、そのネックのところから改革していくことが必要なのです。ここでは、そのような観点から、体育やスポーツと政治との関係について考えてみたいと思います。

### 「スポーツ産業」なしには スキーはやれない

東北の蔵王温泉は、スキーで有名なところ。昔、私が学生のころはスキーを肩に担いで、地蔵山によく登りました。そして、帰りは山頂から、樹氷のあいだの滑走を楽しみました。

このときよく見かけたのは、背中にゴザを背負ったおじいさんやおばあさんの姿でした。地蔵山の山頂の近くには、大きなお地蔵さんがありました。おじいさんやおばあさんはそれをおまいりにきたわけです。そして、おまいりがすむと、ゴザをお尻の下にしき、みんなでキャーキャーいながら滑っておりていくのでした。これが、この地方に住む人びとの冬の楽しみだったのです。

ところが、しばらくして、ロープウェイやゴンドラが山頂の近くまで行くようになりました。すると、みんながスキーを持って山頂まで行くようになりました。この人たちがいっせいに樹氷のあいだを滑って下りてくるのですから、おじいさんやおばあさんたちがもうゴザソリを楽しんでいる余裕はなくなってしまったのです。

人びとはおじいさんやおばあさんに言いました。「命がだいじだから、そんな遊びはやめなよ」と。このように

して、村の人たちの伝統的な冬の楽しみはカゲを潜めていったのでした。

近代「スキー」の「発達」の背景には、このような物語があったのです。「スキー」は、スポーツ産業と結びつき、あるいは地域開発といった政治と結びついて、発達してきたのです。また、この発達の背景には、「スキー」は「健康」にいいとか、すぐれた「運動文化」であるとかいった価値観もはたらいたと思います。このように、「スキー」はさまざまな権力と結びついて「発達」し、現代の社会生活の中心部にのしあがってきたのです。

しかし、このような「レジャー文化」の発達、の裏にいろいろな問題が作りだされてきていることは確かです。先に述べたような、民衆の伝統的な娯楽の収奪ということもあります。あるいは、自然の破壊も大きな問題になっています。このほかにもいろいろありますが、忘れてならないことは、人びとはもはやスポーツ産業などの作りだしたスポーツ・サービス制度に依存しないかぎり、スキーができなくなっているということ。この傾向を、ここでは「政治化」と呼ぶこ

うとしたスポーツと政治との結びつきは、いまますます強くなってきているといわなければなりません。政治との結びつきを強くしてきているこの傾向を、ここでは「政治化」と呼ぶこ

とにします。しかし、ここでは政治という概念を広く捉え、いわゆる「権力」との結びつきの強化を、すべてこの概念で考えていくことにします。そして、「権力」には、せまい意味での政治的権力のほかに、経済的権力・文化的権力なども含まれます。

### 「愛郷精神」に からめとられた鬼剣舞

ところで、そもそも近代的な「スポーツ」はきわめて政治的に作られた文化であるということも、ぜひ知っておかなければなりません。

昔、イギリスで、民衆の楽しんでいた「原一スポーツ」というのは、たいへん自由で、反体制的なものであったといわれています。それは、民衆のフットボールが、国王や市長によって、法令で30回も禁止されたことからわかります。そのころのスポーツは民衆のエネルギーのはけ口のようなものであって、しばしば社会の秩序を無視し、破壊したりするので、支配者にとっては危険物だったのです。

しかし、18世紀にはいると、スポーツは逆に為政者たちによって利用されるようになりました。まず、生徒の管理に手をやいたパブリック・スクールでは、乱暴はしないと、秩序に従うといったことを交換条件として、生

徒にフットボールをすることを奨励しだしたのです。これがそのあとから「洗練」されて、「サッカー」や「ラグビー」といった近代「スポーツ」になったのです。

これについて、ある人はつぎのように述べています。「——四六時中、監督の重荷を負った学校は、若者達をもっとも安上がりに過ごさせる手段をスポーツに見出したのです。ですから——生徒達が、グラウンドにいる間こそ、もっとも監督しやすかったのです。彼等は、<sup>①</sup>健全な運動に没頭し、暴力で建物を壊したり、先生をやじったりする代わりに、その力を自分達の仲間にもわけてくれたからです」と。

これからわかるように、近代「スポーツ」というのは、自由で、反権力的な性格をもっていた民衆娯楽が、時間的にも、空間的にも、かつ<sup>②</sup>政治的にも、<sup>③</sup>囲い込まれる、ことによって、作られてきたものなのです。近代「スポーツ」というのは、いわば民衆的な<sup>④</sup>政治の牙、がぬきとられることによって生まれてきたといつてよいでしょう。

このような「政治化」の例は、わが国の踊りの歴史にもみることが出来ます。たとえば、岩手県の鬼剣舞の歴史をひもとくと、イギリスのフットボールと同じような経過をそこにみるこ

ができるのです。わらび座の茶谷十六さんの論文を参考にして、紹介してみましょう。

鬼剣舞の発祥は古いのですが、幕末ちかくなるとこれが一揆と結びつきます。盛岡藩では、一揆は全部で133回も起こりました。ですから、藩主たちは、どんなことにせよ、民衆が集まることに恐れを抱いていました。鬼剣舞は、そのうえ、鬼の面を被り、剣を持ち、集団で地面を足でたたきつけながら踊るので、一揆でむごたくしく殺された人びとに対する無念さがストレートにでてきます。藩主が神経質になるのも無理がなかったのです。

そこで、藩主たちは、「藩法」で、ときには鬼剣舞を名指しにして禁止します。明治にはいっても、踊りは「野蠻の余風」であって、鬼の面を被ったりするのは「文明の日に当たり」恥ずべきこととされました。しかし、明治の中期以降になると、踊りは一転して天皇制絶対国家を支える手段として利用されるようになります。このときの<sup>⑤</sup>うたい文句、は、「愛郷精神」を養うということでした。

そして、第2次大戦にはいると、宝塚歌劇団が「鬼剣舞」をもって東南アジアをまわって歩くまでいたるので、このときの「鬼剣舞」は、「国策」の一環に組みこまれたもので、昔、民

衆が支えていた鬼剣舞とはまったく性格を異にするものであったことはいうまでもありません。このような、あまりにも露骨な政治との結びつきは、この生き生きとした民衆娯楽のその後の生き方を大きく変えてしまったのです。

### 「スポーツ振興」が生む ナショナリズム

「スポーツ」が政治との結びつきを強め、ナショナリズムをあおっていることは、現代のエリート・スポーツにおいて、とくに顕著にみられます。

中曽根元首相は、ソウル・オリンピックをまえにして、「スポーツの振興に関する懇談会」なる私的な諮問機関を作りました。そして、この懇談会は、1988年の3月に、答申をだしました。その内容は、選手強化のための方策一色であったことはいうまでもありません。選手強化のための最近の政府の動きには、目をみはるものがあります。これらについて一つひとつ述べている余裕はありませんが、政治化は、スポーツの外からと内からとの働きがあいまって、急速に進行してきていることは確かです。

政府が、エリート・スポーツ振興に力を入れるようになったのにはいろいろな理由があったと思います。中曽根

元首相は、前述の「懇談会」の初会合で、「学校スポーツは、お遊びの一種のようになっており、子どもらにもっとガッツをもってもらう必要がある。来年のソウル・オリンピックも心配だ。やはり競技は勝つためにある」などと述べています。

この談話から感じることは、強い国家主義への志向性です。スポーツは、国家主義的な価値観を植えつけるのに最適なものとなっています。「ルールの遵守」、「集団への忠誠」、「絶対的服従」などの道徳は、為政者にとって、このうえなく魅力的なことがらなのです。

同時に、スポーツはそれを見る人に「ふるさと」意識を呼びおこさせます。そして、「国家」との混同をおして「国家」を忘れさせ、結果として現代国家を内から支えていくことになるのです。戦後、「日の丸」「君が代」を早くから支えてきたのはスポーツであったことを忘れてはならないと思います。このようにハードとソフトの両者があいまって、ナショナリズムの完成に働くのです。

エリート・スポーツにしろ、大衆スポーツにしろ、現代の「スポーツ体制」のなかに人びとを組みこんでいくことは、このような意味から、きわめて重要になってきているといえましょ

う。「スポーツ体制」のなかに人びとを組みこんでいくこと、すなわち「スポーツ体制内化」は、イコール「政治体制内化」を意味しているのです。いま、政府は、国を挙げて「スポーツ教育」にとりこんでいるといってもよいでしょう。

### スポーツ 競争主義から、協同主義へ

「スポーツ」とは、一般に活発な身体活動であり、競争であり、遊びであると考えられていて、人類の文化にとって普遍的なように思われています。しかし、最初に述べた「ぼんつく」の話からもわかるように、「スポーツ」が発展してきたのはごく最近のことです。それもむしろきわめて特殊な条件のもとで作られた特殊な文化であるといっているのです。

私たちは、「トロプス運動」というのをやっています。トロプスとは、sport というつづりを逆から呼んだもので、スポーツをいわば逆転させて楽しむということを目指しています。たとえば、競争ではなくて、協同だという主張もその一つです。そのような遊びのなかに、「協同的な椅子取りゲーム」というのがあります。

ふつうの競争的な「椅子取りゲーム」については、みなさんも子どもの

ころにやったことがあると思います。たとえば、椅子を5個、丸く並べておき、その回りを6人の人が走ります。そして、音楽がやんだら、みんなが椅子に座るようにします。しかし、一人だけ座れない人がでてきます。その人は抜けます。つぎに、椅子を1個へらして同じことをくりかえします。そして、また一人、抜けます。このようにしていったら、だれが最後まで生き残るか、というのを楽しむのがこのゲームの目的となります。

ところが、このゲームには、もっと違った遊び方もあるのです。それは、協同的な「トロプス椅子取りゲーム」というやり方です。遊び方は、まえの競争的な椅子取りゲームと同じです。ただ違うのは、音楽がやんだら、みんなが椅子に座るところです。1個、椅子がたりないのですが、どうすればよいかというと、1個の椅子に2人が座るようにすればよいのです。つぎに、椅子だけ1個減らして同じことをくりかえします。最後にどうなるかというと、1個の椅子に6人がどうやって座るかというのが課題になります。

もうおわかりのように、この遊びの目的はだれが生き残るかではなく、みんなが力をあわせることを楽しむことにあります。この遊びでは、落ちこぼ

れる人はだれもいません。

ここでいいたいのは、「スポーツ」という『競争的な身体文化』はけっして普遍的なものではないということです。協同的な「すば一つ、だつて、たくさんあるわけです。競争的な「スポーツ」は、まえにも述べたように、むしろ特殊な条件のもとで作られた、特殊な文化であると考えておいたほうがよいでしょう。それを、普遍的文化だからみんながやるものなどと考えると、とんでもないことが起こってきます。みんなが「スポーツ」が好きだというわけではないのに、きれいな人にそれを強制しておいて「楽しい体育」もないものです。

#### 「大人の旗振り」のさかんな少年スポーツ

「スポーツ教育」のなかで中核となっているのは、なんといっても「体育」です。「体育」は、子どもたちを早くから上述のような「スポーツ体制」のなかに組み入れていくことを主要な役割としてきました。体育教師はそれを「陽気に」「善意に満ちて、かつ」「科学的、に行なってきたのです。

しかし、「スポーツ」は幾重にも恣意的なもので、政治化してきている代物なのです。体育教師は、少なくともその点に対する思考と判断が必要でし

た。ところが、政治性に対する無知という点では、戦時体育と基本的に同じだったのです。したがって、スポーツがどんなに右傾化しても、体育教師はそれを嬉々として支える可能性をいまだにもっているといえましょう。

ひたすら「スポーツ体制」へのくみいれを至上の目標とするような体育に、「楽しい、体育などありえないのです。あったとしても、それは、せいぜいサービス産業のなかで踊る、陽気な消費者づくりでしかないのです。逆に、上述の目標にこだわれればこだわるほど、子どもたちの反発を招き、暴力の緊張を高めてくることになるのです。

このように考えてくると、体育は、基本的にむしろ反「スポーツ体制化」の方向をめざすべきだということになってきます。その点で、前述のトロパスは、そのための有効な目標と手段を提供してくれるでしょう。

ここまで、部活動のことについてほとんど述べてきませんでした。部活の過熱化も、政治化と結びついていることは明らかです。というのは、部活の過熱化をもたらしてきている大きな要因の一つに、「大人の旗振り」ということがあるからです。

旗を振る大人たちの先頭にいるのは、国です。子どもたちに、首相みず

からがガッツを求め、いろいろなスポーツ振興策をうちだしてきているのです。また、スポーツ団体（日本体育協会やJOCなど）もそうです。子どもたちのスポーツ振興にいちばん熱心なのが、この人たちです。第3番目に、学校の先生たちがいます。とくに、管理主義教育には部活が必要なのです。

したがって、親たちが、これらの「大人たちの旗振り」に対してなんとかしていかないかぎり、過熱化の悩みは消えないということになるでしょう。学校をとりまくまわりの勝利至上主義についてもなんとかしなければなりません。そのためには国体批判やメダル主義批判も、子どもたちを守るうえで重要になってきています。

けれども、部活は子どもたち自身がやりたがっているという重大な要因のあることも忘れてはなりません。これは、いまの受験中心的な教育状況や、管理主義教育のもとで生じてくる当然の帰結なのかもしれません。子どもたちはスポーツのなかにしか、自分たちのアイデンティティーを見いださなくなっているということもあります。

部活も、こうしたネッコのところからの改革が必要になってきているのです。  
(愛知教育大学)